有本真紀・阪井恵・山下薫子 編著
『教員養成課程 小学校音楽科教育法』
教育芸術社 2008年 B5判 200頁 ￥1680(税込)

水谷智彦

本書は，平成20年3月の小学校学習指導要領改訂を受けて新しく編まれた，小学校音楽科教育法のテキストである。今次の改訂では，音楽科の指導内容に〔共通事項〕という項目が新設された。それまでの「表現」・「鑑賞」の2領域に加え，それら2領域の活動を通して，共通に指導すべき内容が〔共通事項〕である。その解説の付加とともに，幼小・小中の連携について，Q＆A方式で新任教師がもつような素朴な疑問に答える部分，鑑賞教材についての項目が，本書の特色となるトピックである。以下ではこれら4点の概要を述べ，本書の紹介としたい。

〔共通事項〕は，文言だけでは何やら複雑そうだ，と考えてしまいそうになる。しかし，それは誤りである，と本書は指摘する。ここでは「表現や鑑賞の活動における工夫の仕方（着目点）を，わかりやすく整理したもの」（本書 p.55）と捉えればよいとされる。〔共通事項〕を題材の指導計画に組み込む例には，その捉え方をふまえて，二つの指導計画例があげられている。例では，〔共通事項〕の指導内容（たとえば「リズム」や「速さ」といったもの）を焦点化し，それに準じて，表現と鑑賞の活動の教材をそれぞれ示している。それにより，二つの活動に共通点が生まれ，授業のなかでのポイントも明確になり，評価もしやすくなるし，そうした授業づくりを通して，教員の教材研究における技量も向上すると考えられる。

異校種間の連携については，幼小・小中の移行にあたって子どもたちが経験する急激な生活リズムの変化に留意しつつ，音楽科の指導内容・学習内容においても子どもたちがスムーズに移行できるような配慮の要点が提示されている。

つづいて，多くの新任教員が音楽科の指導場面において抱くであろう疑問や悩みに対して，解決の糸口を提供するQ&A方式のコーナーについて紹介したい。たとえば，音楽科の教員がもつ指導力とは何か，指導力を高めるためにはどうすればよいかという問いがある。指導力とひと言にいわれても，音楽科の指導経験が浅い教員にとっては，その力の捉え方が漠然としており，具体的にどう努力すればよいかわからないだろう。このQ&Aでは，ピアノの苦手な教員が伴奏CDを使用する際の留意点，高学年の音楽嫌いへの対処といった具体的な問題に対しても，合唱指揮者の方法論，心理学者の理論，調査結果などを参照したり，さまざまな方法を提示したりすることで，そうした疑問を解決するためのヒントを与えている。もちろん，それだけが各々の問いをすべて解決するものではない。しかし，そういった視座があると知ること自体が，これから音楽の指導法を探究しようとする教師たちにとって大切であることを示唆しているように思われる。

最後に，鑑賞教材についてである。西洋クラシック音楽については，何を基準に鑑賞教材を選べばよいのか，という悩みにこたえられるように，鑑賞教材として考えられる曲が，一覧表として見やすくまとめられている。作曲者について，どの学年段階で扱うのが望ましいのか，使われているおもな楽器は何なのか，ジャンルや形式，また教材研究のヒントなどの情報が，曲ごとに整理され，教材選択の際に有用な情報となる。また日本の音楽・世界の国々の音楽についても，解説に加えて指導のポイントが示されている。曲についての説明では，その曲がどのように成り立ったのか，どういった意味，背景をもった曲なのか，特徴は何なのかが簡潔に述べられており，教材選びにおいてはもちろん，教材研究を始めるにあたっての基礎資料としても用いることができるだろう。

本書は，授業づくり，教材研究といった教師の実践に即した内容が盛られているのに加え，音楽科教育法が今接している多面的な課題に対応している。現在の音楽科教育に求められている役割とは何か，またそこにおいて教師ができることは何かを網羅的に提示してくれる一冊であるといえる。